

「石水博物館」の魅力

せきすい はんでい
石水と半泥子

平成23(2011)年、緑深き森が広がる千歳山に「石水博物館」が移転開館しました。同館の母体は、昭和5(1930)年に設立された「財団法人 石水会館」。設立者は、一流の財界人である一方、風流人・数奇者としても知られる川喜田半泥子(1878～1963)です。千歳山は、半泥子が居を構え、作陶を始めた地でした。

同館は、伊勢商人・川喜田家の旧蔵資料に加えて、同家16代当主・久太夫政令としての顔も持つ半泥子の作品や関連資料も所蔵。茶碗・水指・花入・書画などを一か所目で目にするのは、「石水博物館」ならではの、といえるでしょう。

現在、第1展示室では(生誕200年記念企画展「川喜田石水―商いを守り、文化をつなぐ―」(4月2日(日)まで)を開催中です。石水(1822～79)と

は、14代当主・久太夫政明のこと。半泥子は祖父である石水をとっても尊敬していました。また、第2展示室では「川喜田半泥子の作品と季節の館蔵品 V期」が開催中です。

今回は、二人の久太夫の足跡をたどりながら、魅力あふれる「石水博物館」をご紹介します。

取材協力／監修

「公益財団法人 石水博物館」

TEL 059122715677

開館時間 午前10時～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)、

展示替期間・年末年始

住所 〒514-0821

三重県津市垂水3032-18



取材・文：中村真由美・堀口裕世
撮影……梅川紀彦・尾之内孝昭
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました



夜の「石水博物館」。ライトアップが美しい



玄関までのアプローチ。秋は紅葉も楽しめる※



第1展示室

「石水博物館」と川喜田家

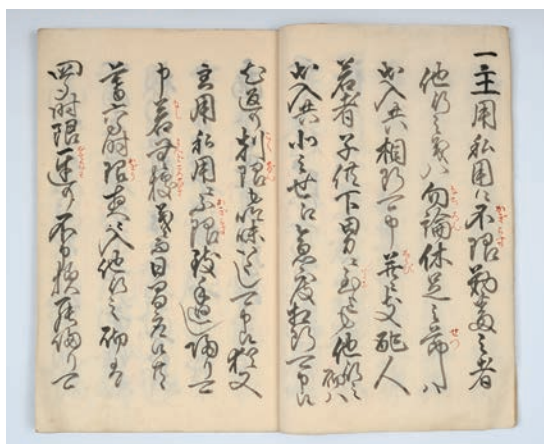
半泥子の開いた博物館

「石水博物館」の歴史は、昭和5(1930)年に、百五銀行の頭取であった川喜田半泥子(16代当主・久太夫政令)が、「財団法人石水会館」を設立したことに始まります。半泥子は、ここを地域文化の振興や社会福祉活動の拠点にと考え、尊敬する祖父、14代当主・久太夫政明の号「石水」を冠かんしました。当初は津市

東丸之内にあり、第二次世界大戦での焼失と再建を経て、平成22(2010)年に法人名を「公益財団法人石水博物館」とし、翌年、半泥子ゆかりの千歳山(津市垂水)に現在の展示施設が開かれました。ここには川喜田家の旧蔵資料を中心に、茶道具、日本画、洋画、古典籍、浮世絵、伊勢商人関係歴史資料など幅広い分野にわたる文物が収蔵され、半泥子の作品や周辺資料も多数保管されています。

武士から豪商へ

川喜田家は、津を拠点とする豪商として知られていますが、商人となる以前は武士であったといい、戦国時代に伊勢国司・北畠家に仕えたという川北内匠頭たけうちを祖としています。4代当主・久兵衛(1575～1649)は、藤室家の客分として大坂夏の陣(1615)に参陣したと伝えられます。



川喜田家家訓『定目』 川喜田石水の筆(江戸時代末期)※

寛永3(1626)年、6代当主・久太夫(1617～70)が江戸大伝馬町えど おおでんまちに本綿仲買店もめんなかがいだなを開いたのが川喜田家の商人としてのスタートでした。貞享3(1686)年には太物問屋ふたものんやとなり、元禄14(1701)年に、名字を川喜田と定め、本綿一筋の商いを展開します。この時代、藍染あいぞめの綿木綿わたもめんが爆発的な流行をみせ、伊勢商人は次々に豪商と呼ばれる規模に成長していきます。川喜田家も江戸に店を構え、家訓を守り、主は地元

にいて経営を掌握する、伊勢商人の経営スタイルを取る豪商となりました。

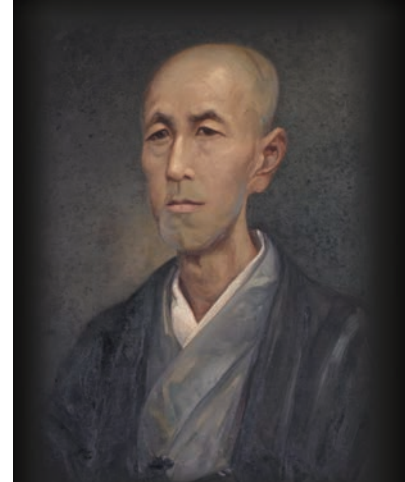
商いと風流好学の両立

9代当主・久太夫光盛(1685～1755)は、早くに隠居して京の嵯峨野庵を営み、桃園天皇から爾然庵じねんあんという庵号を賜るなど、風流人として知られまし

た。その後も、代々の主は多才で、川喜田家には、本業と並行して、風流好学で名を成すことを良しとする家風が確立していったのです。12代当主・久太夫政式(1764～1816)は、本居宣長の門人として歌道を学び、宣長から和歌の添削を受けました。13代当主・久太夫政安あきやす号は遠里とほりは、多くの貴重な古典籍を蒐集し、伊勢国きつての蔵書家となり、同じく蔵書家として全国的に知られた松坂の小津久足こぞく(号は桂窓けいそう)、伊勢外宮の御師で国学者の足代弘訓あしろ ひろのりとも親しく交流しています。



川喜田政安(遠里)像※



川喜田政明(石水)像※
(作者不詳 油彩 明治時代初期)

川喜田石水

大商人にして文化の中心人物

などが細やかに繰り返されています。家の存続を最重視し、木綿一筋という基本姿勢を貫きつつも、一方で、木綿を商い続けることへの不安もあり、経営者としての苦悩は尽きなかったでしょう。

明治維新を迎えると、明治元(1868)年、明治政府から京都に呼び出され、会計基立金の御用掛に任せられ、明治3(1870)年には横浜に支店を開くなど、新時代に向かい、新たな事業を展開しています。

地域文化の中心に

幕末に石水が書いた江戸店への手紙が残っていますが、先の読めない時代の危機感とともに、もしも戦が起こりそうであつたら「各怪我之無き様立ち退き」と従業員を守ることや、日頃から万に備えること、堅実な商いを心がけること

石水が生きたのは、幕末維新の激動を経て、文化の主役が大名から豪商に移った時代でした。そして、津の文化の中心に位置したのが石水でした。その活動は、和歌、茶道、本草学、国学など多岐にわたる、多彩な人々と交流し、膨大な文物を



黒茶碗「ぬり笠」
樂常慶(2代 生年不詳 - 寛永12(1635)年)
箱書きは表千家七代・如心斎

蒐集し、自らも学問に取り組みました。

和歌は、自身の歌集の他、9代目の家集を出版していますし、茶道は、表千家11世の碌々斎の門弟となり、樂家11代慶入とも交流があり、初代長次郎、2代常慶、3代道人(ノンコウ)の茶碗を購入す

るなど、煎茶道の流行に押されつつあった樂家を経済的に支えました。

本草学では、地元の学者たちと物産会を開くなど深い造詣を持ち、「京都平安読書室」を主宰した山本亡羊、榕室父子

から『百鳥図』や『河海并湖水魚之図』を買収求めました。また、2代歌川国貞の依頼で師の3代歌川豊国の浮世絵を入手するなど、多彩な人脈と収集品が結びついています。そこには、学問や芸術を支える明確な信念がありました。

また、石



『河海并湖水 魚之図』と『百鳥図』
山本 榕室は、津城内で藩主に講義を行うなど、津を訪れていた



歌川 豊国作「時世花鳥風月」※
3代歌川 豊国と石水は交流があり、良質な作品が多数残されている

水は松浦武四郎と親しく、その交流は生涯続きました。頻繁に手紙をやり取りし、武四郎から得た情報で購入に至った「秋田銀判」なども蒐集されています。

藤堂家からの名品

石水は大変筆まめな人物で、絵入りの「旅日記」や、多彩な人脈を記した「交友録」、自身での評価も書き入れた「収集品



武四郎自筆の『昌平宝鑑』と
石水が入手した「秋田銀判」



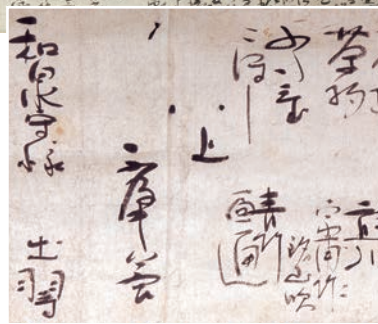
『旅窓漫筆』嘉永6(1853)年の
江戸下向時に石水が記した旅日記※



「松平不昧書状(和泉守宛)」(重要美術品)

でもありました。竹
陶芸を楽しむ風流人
和万古の窯を開いて
は、茶道に親しみ、射
務める商家で、竹斎
府の御為替御用方を
でした。竹川家は幕
(1809〜82)の妹
和の豪商・竹川 竹斎
石水の妻・政は、射

竹川竹斎との縁



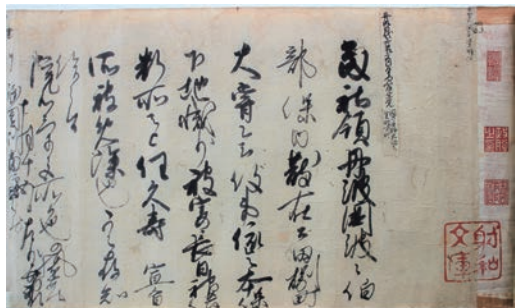
「和泉守様 出羽守」と宛名と署名が見える

との深い縁と信頼が
感じられます。

人脈を介
も一流の
は、いづれ
わる文物
田家に伝
た。川喜
去りまし
この世を
に57歳で
879年
明治12(1

斎は、多額の私費をつぎ込んで射和文庫
という私立図書館を開設しました。竹
斎の取組みに感銘を受け、石水も川喜田
家の蔵書の公開を検討しましたが、松浦
武四郎と相談し、志ある人々へのみ閲覧
させる、という方針を取りました。幕府
の崩壊に伴って竹川家が窮地に立たさ
れたときには、石水が射和文庫の蔵書の
一部や、射和万古を引き取っています。
竹斎が集めた重要な文化財の散逸を防
ごうとしたのです。

石水は、



「伏見上皇院宣」射和文庫の蔵書印が捺されている ※



「石水博物館」の学芸員
で、企画展を担当した桐
田 貴史さん。石水につ
いて教えて頂きました。

し、深い由緒
を持つていま
すが、ことに
石水の残した
品々は、その美
意識や価値観
が現れた名品
ばかり。動乱
の時代を生き
た大商人であ
り、歌を詠み、
茶を点て、文
化を守ろうと
した石水の人
としての大き
さがしのばれ
ます。



「射和万古 赤絵鉢」



「射和万古 寿老人香合」

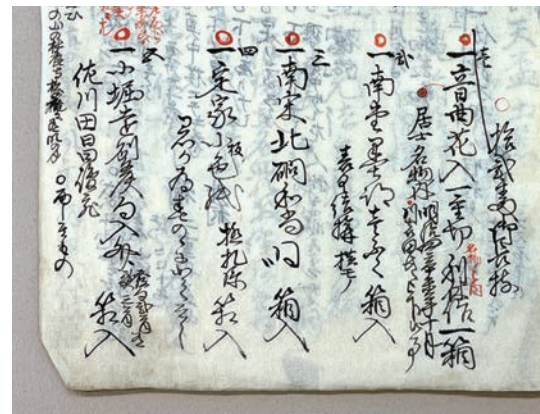
目録」などのほか、藤堂家の蔵に入るこ
とを許されて書き留めた『藤堂和泉守侯
御所持 御名器拝見物之記』も残されて
います。この中に記載のある「音曲」と
いう竹花入れが、「石水博物館」に収蔵さ
れています。豊臣 秀吉の小田原攻めに
同行した千利休が自ら作り、利休七哲の
一人であった蒲生氏郷に与えたとされ、
裏面に氏郷の略称である「羽忠」の文字
が記されています。蒲生家断絶の後、藤

堂家の所有となり、藤堂家と親しく、関
白も務めた近衛家熙が箱書きするなど、
伝来も茶道具としての完成度も申し分
なく、川喜田家の蔵品を象徴するような
名器です。
これは、明治4(1871)年の廃藩置
県の直後に、藤堂家から川喜田家に移つ
たものですが、「松平不昧書状(和泉守
宛)」などの名品も同様でした。定家様
の美しい書体で茶会記などが記された

書状で、11
代津藩主の
藤堂 高猷か
ら下賜され
ました。藤
堂家と、御
用商人とし
て間近に住
む川喜田家



「音曲」の文字は近衛 家熙による



『藤堂和泉守侯御所持 御名器拝見物之記』(部分)
「音曲花入」の文字も見える



「音曲」利休作と伝えられる竹一重切花入 ※
裏面には蒲生氏郷の署名「羽忠」の文字



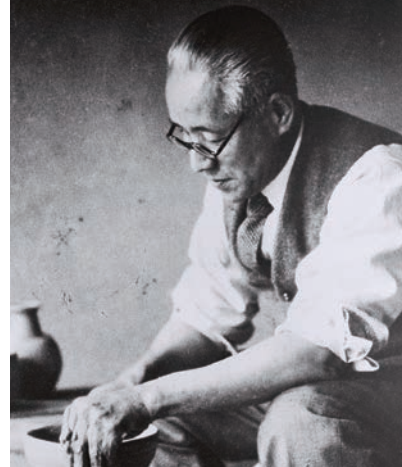
イタリアのローマで撮影された写真
(左から2番目が壮太郎、3番目が半泥子)



「森の回廊」



「千歳文庫」外観



千歳山の泥仏堂にて轆轤を引く
半泥子※

川喜田家伝来品の収蔵庫

「石水博物館」内から、ガラス窓越しに
林立する木々を眺めていると、中世ヨーロッパの塔を彷彿とさせる建物に気付くでしょう。国登録有形文化財の「千歳

歿後60年を経ても色褪せない 川喜田半泥子の魅力

文庫（内部非公開）です。半泥子が誕生したのは、明治11（1878）年ですが、翌年に祖父の石水と父の久太夫政豊を相次いで亡くします。幼くして16代久太夫政令を襲名した半泥子は、祖母の政によって厳しくも慈しみ深く育てられ、高い教養を身に着けました。また、代々の



祖母・政と。明治18（1885）年9月17日※
(中央左が川喜田政、中央右が半泥子)

先祖が蒐集した古典籍2万冊や、多くの美術品に囲まれて育ちましたが、同文庫は、これらの伝来品を収蔵するために半泥子が築いたもの。昭和5（1930）年のことでした。以来、93年にわたって今も収蔵庫の役割を果たしています。

「森の回廊」で100年前の半泥子に会う

同館の2階には、「森の回廊」と名付けられた廊下が続きます。壁面には略年譜と写真パネルが展示され、さまざまな半泥子に出会えます。その中にローマ

に浮かぶようです。

この洋行前に関して、あるエピソードが伝わります。「八方ふさがりやから」と反対された半泥子が「かえって用心がええやないか」と返したところ、「あんたは無茶星や」と芸者が言ったというものが、半泥子は、この言葉をおもしろがり、無茶法師を名乗るように。軽妙洒落な文章で知られる随筆「泥仏堂日録」などで使用しています。半泥子は、紺野浦二（紺の木綿の裏地という意味）・其飯（そのままとという意味）など、遊び心のある号を使い分けましたが、陶芸の場合は主に半泥子の号を使用しました。これは禅の師が授けたもので、何にでも没頭し、泥んこになりながらも冷静に己を見つめなければならぬという意味だといわれます。



「洋行スケッチ帖」から 上段「ホノルル港に停泊する船」
下段「ロシアの船の中のダンサー」



粉引茶碗 銘「雪の曙」
豪快さと繊細さを併せ持ち、半泥子作品の中でも人気が高い一碗。



織部黒茶碗 銘「暗香」
漆黒の肌に表現された梅花が鮮やかな作品。川喜田家の家紋は梅鉢紋で、梅は祖母の政が好きだった花でもある。



高麗手茶碗 銘「雅茶子」
戦後の「上野動物園」で人気を博していた象のガチャ（日本名は花子）にちなんで命銘したといわれる。



つぶれ壺 銘「ふくら雀」
焼成中に潰れて裂けてしまった壺だが、半泥子は竹の筒を添えて花入れとして愛用していた。

多彩な作品が魅了する、 第2展示室



第2展示室

主に常設展示を行う第2展示室では、現在川喜田半泥子の作品と季節の館蔵品V期（4月2日（日）まで）が開催中です。

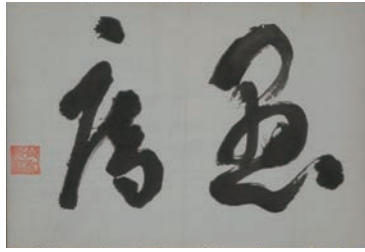
室内に入ると、多彩な陶芸作品に出迎えます。桃色の肌に付いた指痕が、雪の上を歩いた足跡を思わせる「雪の曙」、漆黒の闇の中、梅の花の香りが漂ってきたような「暗香」、像の足のような高台が今にも動き出しそうな「雅茶子」、焼成中につぶれてしまった壺の様子が帯結びの「ふくら雀」に似ている「ふくら雀」、豪快な山割れや歪みが存在感十分の「慾袋」など、銘も機知に富んでいて、想像力を掻き立てられます。理屈抜きで楽しめるのが大きな魅力といえるでしょう。



伊賀水指 銘「慾袋」
国重要文化財の古伊賀水指 銘「破袋（やぶれぶくろ）」を模して、昭和15（1940）年に制作した3点のうちの1点。



紙本墨画淡彩「兎玩具図」



紙本墨書「愚庵」

また、書画もバラエティに富んでいます。たとえば、餅を搗く兎の玩具を淡い色彩で描いた「兎玩具図」は軽いタッチで愛らしく、墨書「愚庵」はどっしりとした力強さを感じさせます。「愚庵」とは、半泥子が「志摩観光ホテル」（志摩市内の茶室に付けた名で、この墨書は同茶室に掛かる扁額の下書きか習作だと思われます。ホテルの所在地、賢島に対して「愚庵」としたところに、半泥子らしさを感じます。なお、「愚庵」が掛けられている茶席「山里」（復元模型）は、昭和14（1939）年に半泥

戦後60年、今も息づく 半泥子の世界

子が設計して千歳山に建てた茶席で、戦後に「廣永陶苑」（現「仙鶴窯」敷地内に移築されました。

半泥子が正4（1915）年に分都町から移り住んだ千歳山は、江戸時代後期に津藩によって公園として整備され、文人たちが来遊する名勝地でした。明治以降は荒廃していましたが、半泥子が邸宅を構えると、再び文化人たちが訪れるようになり、千歳山は津の文化の中心地となりました。やがて、本格的に作陶を始めた半泥子は、納得する作品ができるまで全国各地を巡り、研鑽を積みました。土を採ることから、築いた窯で焼くことまで、の全工程を自分で行ったのです。また、



千歳山にあった洋風建築の自邸「千歳山荘」※

桃山時代（16世紀後半〜17世紀はじめ）の陶芸や朝鮮陶磁に魅せられ、本阿弥光悦（1558〜1637）や尾形乾山（1663〜1743）に傾倒。窯跡の発掘調査を行うなどの研究を続けました。その探求心と行動力は驚くばかりです。戦後になると、長谷山麓の「廣永陶苑」に窯を移し、坪島 土平（1929〜2013）をはじめとする若き弟子たちとともに、轆轤（ろくろ）の日夜を過ごします。その生涯に幕を閉じたのは、昭和38（1963）年のことでした。本年は、半泥子戦後60年という節目の年。4月以降も「石水博物館」を訪ねれば、企画展や特別展などで、新たな作品に出会えるでしょう。また、周囲一帯は公園としての整備計画も津市により継続中です。いつの日かまた、千歳山は人が集う憩いの場となることでしょう。



廣永窯で窯焚きをする半泥子※